

# レーヴィットと近代(1)

——ヘーゲルの宥和の意味——

佐藤 瑠威

## (一) はじめに

カール・レーヴィットの哲学的生涯を見渡す時、もつとも目につくことの一つは、彼の仕事の大半が、十九世紀と二十世紀の哲学者や思想家、特に十九世紀の思想家を対象としている、ということである。

『世界史と救済の出来事』<sup>(1)</sup>のように、古代の思想家にまで遡っていった仕事もある(しかし、それも現代の歴史哲学の起源を問うためのものであって、古代や中世の哲学や思想そのものが独立の対象として問題とされていたとはいえない)が、レーヴィットがもつともしばしばとりあげたのは、ヘーゲル、フォイエルバッハ、マルクス、キエルケゴール、ブルクハルト、ニーチェら十九世紀の思想家とウェーバー、ハイデガー、そしてヴァレリーなどの二十世紀の思想家であった。特に、一九三〇年代から四〇年代にかけてレーヴィットがもつとも旺盛かつ充実した仕事を行っていた時期——『ニーチェの哲学』<sup>(2)</sup>、『ブルクハルト』<sup>(3)</sup>、『ヘーゲルからニーチェへ』<sup>(4)</sup>、『世界史と救済の出来事』といった彼の代表作が書かれた時期——には、まさに彼の主著の名のごとく「ヘーゲルからニーチェ」に至るまでの十九世紀の哲学者、思想家が精神史的考察の対象となっていた。

レーヴィットの仕事の大半が十九世紀の思想家とドイツを中心とす

るヨーロッパの精神史にむけられた理由は、レーヴィットが十九世紀に決定的な変化、(革命的決裂)が生じたこととみたこと、十九世紀がヨーロッパ精神史の決定的な転回点をなすとみたことにある。十九世紀に一つの時代が終りに達し、そしてその後全く新たな時代が始まったということ。そしてこの変化、転回はヨーロッパ精神にとつてきわめて重大かつ深刻な意味をもつ問題だということ。現代の二十世紀のヨーロッパ精神の状況、とりわけナチズムに象徴される精神状況をもたらしただけの原因も、遡ってゆけばこの十九世紀の精神史的現象にいきつくのだということ。レーヴィットがその哲学的思索の大半を十九世紀精神史に向けた理由は、おそらく以上のような考えにもとづいている。現代という時代を精神史的に理解するためには、十九世紀の哲学史、思想史に生じた変化の意味を究明しなければならない。第一次世界大戦後に哲学を始めたレーヴィットは、その時代の精神状況を把握するために、十九世紀の変化の意味をとらえる必要があると考えたのである。

十九世紀精神史において生じた出来事の意味についてのレーヴィットの見方は、図式的にいえば次のようになるだろう。

十九世紀における「革命的決裂」によって一つの世界が破壊的批判を受け、その世界が終りに達したこと、この変化を通して「市民的キリスト教的世界」という一つの時代一つの世界が終わっただけでなく、

二千年近くにわたってヨーロッパ精神の支柱であったキリスト教的世界解釈が生命力をもっていた時代が終つたのであり、そしてさらに、世界をその真実の姿において知ろうとするテオリアの精神を本質とする哲学の伝統がそこで終つたということ、このようなもろもろの意味において、しかも決定的に一つの時代がヨーロッパにおいて終つたのだということである。それはなかななくキリスト教的ヨーロッパの終焉の始まりであり、ヘーローツパのニヒリズムという精神状況の到来によつて特徴づけられる。

この変化は、レーヴィットによれば、基本的にヨーロッパ精神の没落、衰退の過程である。ヘーローツパのニヒリズムという精神状況の意味することは、人間が神を失つて無神の世界に生きるということだけでなく、人間が自らの本来の故郷とみなすことのできるような「世界」そのものを失つたということである。ヘーゲル流に言えば、人間と現実との間の宥和が失われたのである。この世界喪失以来、人間はもはや現実の世界に安住することができず、現実と不和となり、それを不斷に攻撃し、それを超越しようとし、あるいはそれから逃れようとする。そしてまた、新しい精神状況の意味するものは、人間が現実と不和となつただけではなく、およそ生存の意味への確信を失つたという本来のニヒリズムにある。神を失つた人間は目的を失う、すなわちもはや「何のために生きているのかわからな」<sup>5)</sup>くなつたのである。現実の世界に適合できず、そして「神の死」によつて来世への希望も失つた人間は、生きている間は、この世の変化に一縷の望みをかけ、時代の一時的出来事に過剰なばかりの「関心」をよせて「歴史的に」生きていこうとする。かくして、現代の人間にとつて、世界の尺度をなすものは今や「歴史的出来事」となる。人間は「永遠」という尺度を失つてしまう。レーヴィットによれば、現代の人間を特徴づけるものは、神と永遠と世界の喪失である。

しかしながら、このようなヨーロッパ人間、ヨーロッパ精神の危

機は、レーヴィットによれば、決して偶然の出来事でもなければ、起るべきでなかつた墮落でもなく、不可避的必然的な力が作用してあらわれた問題である。かつての世界は決定的に過ぎ去つた世界であり、それゆえもはや二度と戻すことのできないものである。なぜならば、かつての世界——レーヴィットはそれを「市民的キリスト教的世界」とよぶ——は、それ自体矛盾を含んだものであり、それは、遅かれ早かれ、崩壊していかざるをえない運命にあるものであつたからである。

西欧近代についてのレーヴィットの精神史的把握は、以上のように複雑な構造をもっている。それは単線的な進歩でもなければたんなる退歩や墮落の過程でもない。彼はドイツとヨーロッパの十九世紀に決定的な変化、「革命的決裂」が生じたとみる。その変化以後の時代は、ヨーロッパ精神の衰退、しかもたんなる退歩ではなく、きわめて深刻な危機を根底にもつ衰退の時代である。しかしその変化以前の時代は、原状復帰を願つたり、ただ望郷の念によつて回顧されるべきものではなく、不可避的に崩壊せざるをえなかつた矛盾を含んだものであり、それゆえに批判的に客体化してみなければならぬものである。だとすれば、近代という時代を十九世紀における変化によつて二つの本質的に異なる世界からなるものとみなながら、レーヴィットは、その二つの世界のそれぞれに対して批判的に対峙しているわけである。すなわち、「市民的キリスト教的世界」として「ヘーローツパのニヒリズム」によつて特徴づけられる時代との双方からなる「近代」の総体が問題視され、批判的に客体化されているのである。

このように、レーヴィットは、思想史的にはルネサンスと宗教改革に始まつて今日に及ぶ「近代」という時代——それは、しばしば、一つの連続的な過程として、しかも基本的に進歩の過程としてみられる——を、十九世紀の「革命的決裂」を境にして二つの本質的に異なる時代から成るものとする。そして十九世紀以降の現代を、ヘーローツパの

ニヒリズム」という精神の危機を深くはらんだ時代として、そしてヨーロッパ精神の衰退の過程として批判的にみながら、しかもこの「革命的決裂」以前の時代、「市民的キリスト教的世界の」をも、人間が自らの本来の故郷とみなしうるような世界を有していた、換言すれば、人間が現実との宥和を有していた世界ではあるとしても、その内在的矛盾によって崩壊すべくして崩壊した世界として、すなわち根本的に問題をはらんだ世界として批判的にみるのである。

十九世紀を中心においた近代ヨーロッパについてのこの独特な見方に精神史家、哲学史家としてのレーヴィットの著しい特質が存すると同時に、このような見方こそが戦後のレーヴィットの哲学的主張——近代の哲学思想に沈殿しているキリスト教的神学的要素の剔抉、歴史哲学の批判、自然を中心とする古代ギリシャの哲学的世界観の意義の強調、人間の本性と世界の探求の試み——を促し、駆り立てていったものである。もし今日、レーヴィットの哲学——それはあまりにも反時代的な主張であったがために、ほとんど影響をあたえることがなかった——に独自の価値と意義を認めるべきだとすれば、彼の哲学の全容を知るためにも、その哲学の積極的主張の根底にある彼の十九世紀を中心とする近代の精神的把握に遡って考察していかねばならない。

## (二) ヘーゲルの宥和の構造

レーヴィットは、十九世紀のドイツ哲学史と精神史——それはたんに哲学という学問の一領域の問題にとどまらない社会的広がりをもつと同時に、たんにドイツでの出来事にとどまらないヨーロッパの広がりをもつ問題でもある——に決定的な変化、「革命的決裂が生じた」とみる。哲学史家・精神史家としてのレーヴィットの仕事の主要な動機の一つは、この十九世紀の変化がいかに重大かつ深刻な意味をもつ問

題であるかを、この変化以前の時代をすでに想起することができなくなっている現代の人間の眼にはつきりと映しだしてそれを認識せしめることにある。この変化以前の時代をもはや想起することができないがゆえに、現代の人間はこの変化以後にあらわれた精神状況を真に客観化することができず、それゆえまた現代における真の問題を認識することができない。十九世紀における変化は、それがヨーロッパ精神史の全体の中でもっとも根本的な変化の一つであったという理由だけではなく、まさに現代という時代とそこにおけるヨーロッパ精神の特質を客観化し把握するためにぜひとも必要な手続き、方法として主題化されねばならぬものである。レーヴィットは、この変化以前の時代において人間がいかに世界を見ていたか、そしてその世界の中でいかに自由に生きていたかを示すとともに、このような人間の世界がその後の時代と思想の変化によっていかに失われてしまったか、それがいかに重大深刻な喪失を意味するものであったかを明らかにする。この変化の前後を対照させ、この変化がいかに決定的な変化であり、この変化によって人間がいかに重要なもの——神と永遠と世界——を失ったかをまざまざと示すことによつて、レーヴィットは現代人に自己客観化のための鏡をあたえようとしたのである。

このような基本的視点と問題意識にもとづくレーヴィットの十九世紀精神史研究「ヘーゲルからニーチェへ」において、この変化以前の世界を象徴するのはゲーテとヘーゲル、特にヘーゲルである。ゲーテとヘーゲルはともども「市民的キリスト教的世界の」というその後の変化によつて崩壊した過去の時代を代表する二人であるが、ゲーテは、世界史的事件だけでなく自然の世界に対して開かれた豊かな感覚、変化よりも恒常的なものを、瞬間の中に永遠のものを見ようとする態度、そしてキリスト教に対する敬虔ではあるが異教性をもつたとらわれぬ態度によつて、たんにこの変化の前を代表する人間としてではなくて、時代を越えた意義をもつ人間として位置づけられている。これに対し

てヘーゲルはまさに過ぎ去った時代を代表する哲学者である。しかし、ヘーゲルはかつてないその体系的思索力によって世界史を総括し、歴史の現実を理論的に把握し、明確な哲学的価値判断をもあえて行うことによって、その時代に対して巨大な影響を及ぼすことになった。そしてその巨大な影響ゆえに、十九世紀における哲学や思想の変化も主としてヘーゲル哲学に対する反抗・批判・攻撃として開始され、展開されていくことになった。十九世紀における変化以後の新たな哲学思潮を代表する実存主義とマルクス主義もヘーゲル批判の潮流のただ中から生まれてきたものであった。その哲学の内容的豊かさや力、その時代に対する圧倒的な影響力、そしてその後の歴史的経緯、これらのすべてがヘーゲルの哲学に一つの時代を代表する哲学にふさわしい性格をあたえている。レーヴィットが変化の前の時代をゲーテとヘーゲルによって代表させ、そしてゲーテの思想に時代を越えた意義を見出しながら、しかもヘーゲルを中心においてその思想を詳述していった理由は、何よりも以上のごときヘーゲル哲学の時代的性格にあった。

レーヴィットがヘーゲル哲学の特徴として指摘することの一つは、とりわけそれが〈宥和の哲学〉であるということである。ヘーゲルの哲学的思索を動かしているもつとも根底的な動機をレーヴィットは現実と宥和しようとする傾向の中に見ている。古代からのヨーロッパの哲学の歴史を概観して気づくことは、哲学が体系となり、世界観として全体としての世界についての統一的な見方をつくり、とりわけ人間の生を方向づけようと試みる時、世界観としての哲学は、真理の追求であると同時に宥和の追求ともなることである。真理を知ることと現実と宥和することとは、本来同一の問題ではなく、むしろ現代の意識においては両者は矛盾し対立するものときえみられるが、ソクラテス、プラトンからヘーゲルに至る哲学史においては、真理を知ろうとする情熱と現実と宥和しようとする意図とが分かちがたく存在し、両者のいずれかをそこねることなく両方の欲求を満たすような体系が形成さ

れていった。ヘーゲルの哲学も明らかにこのような伝統の中にあるものである。しかし、ヘーゲルの哲学が一つの時代を代表する哲学となつたのは、たんに彼がこの哲学的伝統を無意識にひきずっていたからではなくて、逆に真理の把握と宥和の実現とを哲学の最高の課題として意識し、しかも両者の調和を確信したうえで、それを自らの哲学体系によって実現しようとしたこと、しかもその企てに際してそれまでの哲学にかつてみられなかつたほど時代の現実に向きあつて思索し、歴史の現実と宥和しようとしたことにある。真理と宥和の調和を求める伝統的な哲学の地盤の上で動きながらも、時代の現実そのものに向きあつてそれを実現しようとしたことによつて、ヘーゲルの哲学はその時代の哲学的表現となると同時に、時代を革命しようとする哲学に否定的にはあれ深い影響を及ぼすことになった。

哲学者レーヴィットは、ヘーゲルとは、キリスト教に対する立場といい、哲学と歴史との関係についての考えといい、近代についての見方の厳しさという点では、レーヴィットは十九世紀のヘーゲル批判者たちと共通するものをもつ。それにもかかわらずレーヴィットのヘーゲル哲学に対する立場は単純な否定者のそれではない。また、レーヴィットが十九世紀の決定的な変化の前の時代を代表する哲学者としてヘーゲルをあげ、ヘーゲルを起点としてその後の変化を辿つていった理由は、たんにヘーゲルが過去の時代をもつとも代表する哲学者であつただけではなく、その哲学の基本的構造の中にその後の哲学思想にきわめて深い影響を及ぼしていく「現代的」性格を含んでいたとみただからである。ヘーゲル哲学における「現代的」性格とは、とりわけその歴史哲学的性格であり、また歴史的現代の現実の全体（政治的経済的問題を含んで）と向きあつた思索のありかたである。ヘーゲルの哲学のこの独特な性格が、決定的に過ぎ去つた過去の時代の哲学でありながら、同時にその後の変化をひき起こし、自らに対する徹底的批

判を通してさえその後の歴史に働きかけてゆく「現代性」をつくっている。

プラトンは自然界を越えた永遠不変の真実在としてのイデアの世界を信じ、イデアと人間の魂の類同性と魂の不死を信じ、それを「論証」することによって神的なものとする。キリスト教以後の哲学は、万物の創造主、超越的絶対者としての神への信仰、神の似姿としての人間という考え、神の受肉としてのキリストとキリストによる救いへの希望、彼岸世界への信仰などを生みだしたキリスト教的世界の圧倒的影響の下に、宥和をあたえる世界観を形成してきた。真理と宥和の調和を確信し、キリスト教を地盤として思索していた点で哲学の伝統を深くひきずっていたにもかかわらず、ヘーゲル哲学の画期性は、真理と宥和の獲得を歴史的な世界の中で求め、歴史的現実そのものの中で現実との宥和をうちたてたということにある。

レーヴィットは、ヘーゲルの哲学がたんに『歴史哲学』や『哲学史』を含んでいるだけでなく、その全体系が従来の哲学にみられなかったほど根本的な方法において歴史的に考えられていることを強調する。<sup>7)</sup>ヘーゲルは世界を歴史的に考察する。ヘーゲルの哲学は、レーヴィットによれば精神史の哲学である。ヘーゲルが世界を歴史的に、精神の歴史として考察するのは、絶対者は精神であり、絶対精神は歴史の中で自己を実現するからである。逆から見れば、歴史は精神が発展していく過程である。ヘーゲルによれば、精神は自己を意識する存在であるが、自己を意識する存在のみが自由に、すなわち歴史的に生きることができる。精神の本質は自由であり、自由な存在のみが変化を意識し、歴史的变化と発展を経験することができる。歴史は精神的存在にもっとも固有な事柄である。世界史は精神の進歩発展の過程であり、自由な意識の進歩である。ヘーゲルの哲学がその根本において歴史的であるのは、世界の実体をなす精神が本質的に歴史的であるからであ

る。ヘーゲル哲学のこの「歴史主義」は、ヘーゲル哲学の徹底的批判者であるマルクス主義をはじめとして多くの現代思想に受け継がれていく。

ヘーゲル哲学の歴史哲学的性格とともにレーヴィットが強調することは、ヘーゲル哲学の中核をなす精神の概念が、キリスト教に基づいて理解されていることである。ヘーゲルはキリスト教の画期的意義を、とりわけそれが神を精神として把握したことの中にみる。キリスト教の神にして初めて真に精神である。そして神人キリストにおいて神と人間との宥和がなされ、人間の本質が精神であることが明らかにされた。世界の実体をなすものを精神と考え、精神は歴史的に自己を実現する、いかえれば、歴史とは精神の発展過程であり、人間精神の進歩の過程であるとみなすヘーゲルは、神と人間の本質を精神に見出したキリスト教の出現を世界史の決定的な転回点とみる。キリスト教の出現によって、世界史の原理、進歩の原理が明らかとなり、人間がそれを自覚するに至った。ヘーゲルは『歴史哲学』において世界史を進歩のプロセスとして描き、世界史の進歩の過程を(一)、東洋の世界、(二)、ギリシャ・ローマの世界、(三)、キリスト教的ゲルマン世界、の段階からなるものとして叙述していったが、キリスト教の出現は、歴史の最高の段階でもあり、世界史の決定的な転回点であるとする。ヘーゲルの哲学はキリスト教を絶対的に評価する哲学であり、ヘーゲルはキリストが神的なものとする人間性との分離を宥和せしめた点にキリスト教の哲学的真実性をみて、この宥和を思惟においてつくりだすことを自らの哲学の目的とするのだからヘーゲルの哲学は「哲学的神学」である、とレーヴィットはいう。<sup>8)</sup>

ヘーゲルは世界を歴史的に考察し、歴史を精神の進歩の過程としてみるが、歴史的变化の軸をなすのはキリスト教であり、世界の歴史の見方とキリスト教の見方とは不可分なものである。キリスト教の出現は世界史の決定的な転回点であり、歴史の最後の段階の始まりであり、

進歩の最高の段階の始まりである。そしてその後の歴史は基本的にキリスト教原理の実現過程である。キリスト教の原理をなすのは精神の自由である。キリスト教以後の歴史はこの精神の自由の原理が実現していく過程にほかならない。キリスト教によって神と人間の本質が精神であること、精神の自由こそが人間のもっとも固有の価値であることが明らかにしたが、この主観的自由を客観化していくこと、とりわけ国家という客観的精神において自由を実現していくことが歴史の課題となる。

ヘーゲルは、近代のヨーロッパを、とりわけフランス革命以後のヨーロッパの現実、そしてドイツ国家の現実を、歴史の究極目的が実現された世界として把握した。レーヴィットは、ヘーゲルの哲学がたんに歴史的構造をもつだけではなく、終末史的構造をもつことを強調する。ヘーゲルはたんに世界を歴史的に考察し、歴史を進歩の過程としてみただけではなく、今や歴史が完成することによって終結したとみたのである。ヘーゲルの哲学は歴史を完了させた哲学なのだとレーヴィットはいう。ヘーゲルは『歴史哲学』において精神の進歩の過程を描き、宗教改革から啓蒙主義を経てフランス革命に至るヨーロッパの近代とそして当時のドイツの現実において進歩が実現し、歴史が完了したことを示すとともに、『法哲学』において歴史の完成態としての近代国家の現実がいかに理性的であるかを詳述した。精神の自由の原理の実現過程として歴史を考察するヘーゲルにとつて、近代はこの原理がたんに個々の意識において自覚されただけではなく、客観的に、とりわけ国家において実現された時代である。近代とは主観的自由と客観的自由の統一体である。すなわち、一方において、個々の主観的意識が完全に発展して主体的自由に達するとともに、他方において、法律や国家の組織が理性的なもの、普遍的原理に基づくものとなること、換言すれば、主観がその自由な意識の発展を通して普遍的正義を洞察し、そして自ら意欲して普遍的正義を主体的に担おうとすること、逆

からいえば客観的倫理が個々の主観に浸透し、主観を貫ぬいていること、要するに、主体が自立し、主客の区別が存在しながらも、主観と客観とが相互に浸透しあつて、主体が理性的となり、理性が主体によって支えられることによって生き生きとした力をもつ、このような状態が近代世界において実現したとヘーゲルはみたのである。ヘーゲルの精神史の哲学において、客観的精神としての国家こそが精神の進歩の状態を示すものであるが、個々人の主体的自由の十全な発展を可能とする市民社会を内部にもち、その主体的自由によって支えられている近代国家は、歴史の進歩を完成するものであつた。

歴史的進歩の核心をなす精神の自由の原理が現実浸透し、それが客観的に、国家において実現した時代、それが近代であるとされる。それは歴史の究極目的の摂理が実現し、理性が実現した世界である。近代は歴史が完成することによって終結した世界、歴史が完了した世界である。ヘーゲルは、歴史の目的が実現し、現実が理性的となったこの近代世界において、人間と現実との真の宥和が可能となつたとみた。ヘーゲルにとつて、その時代は人間が現実と宥和しうる真に理性的な世界であつた。そしてヘーゲル自身の哲学的努力は、「現実が理性的である」こと、歴史が理性的に展開してきたことを哲学的に論証することによって、真の宥和を自ら積極的にうちたてることにむけられたのである。

レーヴィットは、ヘーゲルの哲学の根底に宥和への傾向が存在することと同時に、それが時代の現実と宥和しようとした哲学であることを強調している。たんに宥和を求めただけではなく、歴史的变化のただなかに身をおいて思索し、その歴史的現在の現実と宥和したということ、ここにヘーゲル哲学の際立った特性がある。

キリスト教はもともと貧困と差別と抑圧と不正にみちた現実の中であえぎ苦しんでいる人々の魂の救いへの願望に応えるものとして発展してきたものであり、現世に対する否定的な見方を根底にもつもので

あつた。そこでは世俗の世界と神の国、現世と来世とが区別され、現世における苦難は神と彼岸世界への信仰によって耐え忍ばれ、神と神の国への信仰こそが宥和をあたえるものであつた。このように地上の世界と神の国とを区別して、現世の苦難のさ中であつて、神と永遠の世界を想い、それへの信仰によって宥和をえようとする考えとは異なつて、ヘーゲルはキリスト教の終末論信仰を現実の歴史の解釈にひきうつすことによつて、地上的世界の歴史の現実そのものと宥和しようとしたのである。

たんなる信仰によつてではなく、世界の学的認識を通して世界との宥和をうちたてるといふ空前の仕事を行つた。ヘーゲルの哲学がたんに哲学者の間だけでなく、その時代に巨大な影響を及ぼしたという事実は、ヘーゲルの世界認識、現実把握が強い説得力をもつものであつたことを示している。ヘーゲルの哲学によつていまだかつてない宥和の世界がつくられた。レーヴィットは、ヘーゲル哲学の精神的意義を、何よりもこの哲学が、人間がこの世界を自らの本来の故郷としてそれと調和しつつ生きるべきものとして把握したこと、かくして人間が宥和しうる世界をうちたてたことの中にみている。レーヴィットは、ヘーゲルとゲーテによつて代表される「市民的キリスト教的世界」を、人間がいまだに世界に自己の住処をもち、現実と調和しつつ生きることできた時代とみている。<sup>110</sup>

しかし、ヘーゲルが哲学的思索の対象を絶えず変化していく歴史的世界にむけ、歴史的現実そのものとの宥和を企てたことは、逆に歴史的变化の影響をまともに受け、時代の変化によつてその哲学的生命力、影響力を失うという運命をもつことになつた。レーヴィットはゲーテとヘーゲルの死の直前、一八三〇年の七月革命の前後から、民主主義的水平化及び産業化の結果、世界は別なものへと変化していったといひ、<sup>111</sup>ヘーゲルの死から十年もたたぬ一八四〇年前後には、ヘーゲル哲学と時代との分裂が始まつたといふ。ヘーゲルがかつてないほど徹底

的に現実と宥和することができたのは、歴史の進歩という觀念が時代の思潮をなしていたことと、ヘーゲルの哲学が歴史の現実を深くとりこんだものであつたことにも由来するが、レーヴィットは、ヘーゲル哲学の現実との宥和の根底に、現実へのいかにがわしい順応にもとづくいつわりの宥和をもみる。<sup>112</sup>「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」というあの有名な『法哲学』の序文の言葉は、現実の中に理性的なものをとらえるヘーゲルの卓越した思索力と、現実を理性にすりかえるヘーゲルの現実へのいかにがわしい順応との両面をあらわしている。このような性格をもつヘーゲルの哲学は、時代の変化によつて徐々に影響力を喪失していく過程をたどるのではなく、現実と虚偽の宥和を行つた哲学として徹底的に批判され攻撃されることによつて急速にその影響力を失っていくことになつた。ヘーゲル哲学に対する批判は、いわゆるヘーゲル左派、青年ヘーゲル学派の人々、フォイエルバッハ、アールノルト・ルーゲ、マルクス、マックス・シュティルナー、ブルノ・パウアー、キェルケゴールらによつて徹底的に行われる。レーヴィットは、彼らのヘーゲル批判を詳細にたどつていくことによつて、ヘーゲル哲学の世界がいかに解体し、その批判の中から、とりわけマルクスとキェルケゴールによつていかにマルクス主義と実存主義という新たな思想が生まれてくることになつたかを示している。

現実の世界における変化以上に激しく根本的な変化が、十九世紀において、哲学や思想の世界に生じたように思われる。レーヴィットは十九世紀精神史研究は、この変化がいかに巨大かつ根本的なものであり、そしてそれがいかに人間にとつて深刻な意味をもつものであつたかを明らかにするものである。十九世紀精神史における変化が激烈なものとなつた原因を、レーヴィットはたんにヘーゲル批判者たちの批判の鋭さだけにもとめるのではなく、ヘーゲル哲学の特異な性格にもとめる。レーヴィットによれば、ヘーゲルの哲学はたんに一つの時代

を代表する哲学であつたのではなく、自ら意識して歴史を終結させた哲学なのである。ヘーゲルは世界史の終りに立つていよう明確な自覚において、自らの哲学によつて歴史の全体を根本から終結させたのである。ヘーゲルによる歴史の終結が全体的根本的であつたために、ヘーゲル批判者たちの批判も徹底的なものとなり、その批判は根本的に新たな時代を切り開こうとする試みを生み出すことになつた。徹底的な終結こそが徹底的な変革をひき起こしたのである。レーヴィットは、言語、概念、文化の一つの世界がヘーゲルの精神の歴史とともに終末に達したといひ、そしてこの終末から我々の固有の精神史が始まるのだといふ。<sup>106</sup>

ヘーゲルとともに一つの世界が終つたとレーヴィットはいう。それはたんにヘーゲル哲学の影響が終つたということではなく、ヘーゲルが代表していた「市民的キリスト教的世界」が終つたということであり、ひいては二千年に及ぶキリスト教的世界が終りを迎え、そしてさらに従来の哲学的精神が終焉を迎えたことである。このような決定的な意味において一つの世界が終りを迎えたのである。レーヴィットの十九世紀精神史研究を特徴づけるものは、この変化がヨーロッパ精神史における決定的な変化、一つの時代の終わりなのだとする点と、この変化が必然的不可避的な性格のものであり、過去の世界はもはや取り戻すことのできないものであるとすること、そしてこの変化は基本的にヨーロッパ精神の衰退、没落の過程であるとする点と、このようなことにある。この変化はとりわけヘーゲルによつてうちたてられた宥和から「ヨーロッパのニヒリズム」へという変化である。それは世界観における決定的な変化であり、それゆえにヨーロッパ精神の危機を意味する。ヘーゲル批判者たち、とりわけマルクスとキェルケゴールは、この変化の必然性と問題の重大さをそれぞれ深く認識し、ヘーゲルの哲学と「市民的キリスト教的世界」とを徹底的に批判し、その克服を企てていった。レーヴィットは、ヘーゲルの哲学と「市民

的キリスト教的世界」とが没落すべくして没落したものであること、マルクスやキェルケゴールをはじめとする人々のヘーゲルと時代への批判がしばしば鋭く問題の本質をついたものであつたことを認めていゝる。それにもかかわらず、レーヴィットは、十九世紀の変化に必ずしも進歩や克服をみないで、むしろヨーロッパ精神の衰退をみている。レーヴィットは、この変化においては、克服されたものよりもむしろ失われてしまつたものの方が大きかつたとみているのである。

レーヴィットは、ヘーゲルの哲学的思索のもつとも根本的な傾向をなすものを宥和といふことの中にみた。現実との分裂を克服し、世界と宥和しつゝ生きることは、人間の生存の基盤をなすものであり、それは人間のもつとも根源的な欲求でさえある。それは哲学成立以前からの人間の精神的動機であつたはずである。世界を眞実の姿において観照し、眞の知識を求める営みとしての哲学においても、宥和への関心は眞理への意志によつて消滅させられることはなく、むしろそれと両立するかのうちに、哲学の歴史を通して世界観のありかたを規定しつづけてきた。特にキリスト教の成立以後は、眞理追究に伴うべき徹底した懐疑的思惟は存立の余地がなくなり、眞理の追究と宥和への関心が調和するキリスト教的世界観の支配下で哲学は思索を重ねてきたかに思われる。ヘーゲルの哲学も明らかにこのような哲学の伝統の中にあるものであつた。哲学と宗教、理性と信仰とが相互の違いを意識しつづきかも一定の調和をたもつてきた世界は、自律的な哲学的思惟の発展によつて徐々に崩れてくる。カントの批判哲学は、理性と信仰との予定調和の世界がもはや維持しがたいものであることの自覚のあらわれとみることが出来る。カントの後にあらわれたヘーゲルは、理性と信仰の裂け目をさらに追求しようとするのではなく、理性によつて信仰を、哲学によつてキリスト教を支えようとする最後の大がかりな試みをあえて行つた。レーヴィットによれば、ヘーゲルは哲学とキリスト教との決裂前の最後のキリスト教の哲学者である。<sup>107</sup>しかし、ヘー

ーゲルはキリスト教思想の正しさを抽象的論理によって説明しようとしたのではなく、具体的な歴史の進行そのものの中にキリスト教原理の実現をみてとるという比類ない仕方です。キリスト教の弁証を行った。孤独な信仰の中で苦悩のうちに求められるべき精神の宥和を学的理性的認識を通して与え、その時代を撰理の実現した世界として終末史的に把握することによって遠い未来や来世ではなく時代の現実そのものとの宥和が今や可能となったと主張した。ヘーゲルの哲学は、歴史上類をみない宥和の体系であった。神的なものとの地上的なもの、キリスト教と哲学、信仰と理性、宗教と国家、理性と現実が宥和する世界が哲学によってうちたてられた。この哲学の世界を通して、人は、歴史の展開の中に撰理を、歴史の時間の流れの中に永遠の理念を、現実の中に自分本来の住処である世界を見出すことを教えられる。ここでは、神と永遠と自分本来の世界が存在していた。真実を求めることと信仰をもつこと、理念を追求することと現実に適応すること、自由であることと国家の中で生きること、その間に矛盾が存在しないかのように生きることが出来る世界であった。ヨーロッパ精神史におけるヘーゲル哲学の意義は、何よりもこのような全体的宥和をうちたてたということにある。ヘーゲル批判によって破壊されたのは、まさにこのような全体的宥和の世界であった。

(注)

- (1) Weltgeschichte und Heilsgeschichte. Karl Löwith. Sämtliche Schriften 2. (信太正三・長井和雄・山本新訳 『世界史と救済史』創文社 一九六四年)
- (2) Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen. Sämtliche Schriften 6. (柴田治三郎訳 『ニーチェの哲学』岩波書店 一九六〇年)
- (3) Jacob Burckhardt: Der Mensch inmitten der Geschichte. Sämtliche Schriften 7. (西尾幹二・瀧内楨雄訳 『ブルクハルト』TBS

- (4) フリタニカ 一九七七年、ちくま学芸文庫 一九九四年)  
Von Hegel zu Nietzsche. Sämtliche Schriften 4. (柴田訳 『ヘーゲルからニーチェへ』I・II 岩波書店 一九五二〜五三年)
- (5) Der europäische Nihilismus. Sämtliche Schriften 2. S. 494. 柴田訳『ヨーロッパのニヒリズム』(筑摩書房 一九七四年)三八頁を参照。
- (6) 本稿のレーヴィットの十九世紀精神史の見方の解説は、『ヘーゲルからニーチェへ』を中心に、更に『ヨーロッパのニヒリズム』と『ヘーゲル・マルクス・キエルケゴール』(柴田訳・未来社 一九六七年 Sämtliche Schriften. 4. L'achèvement de la philosophie classique par Hegel et sa dissolution chez Marx et Kierkegaard. La conciliation hégélienne.) とにおけるレーヴィットのヘーゲル哲学論にもとづいている。
- (7) Sämtliche Schriften 4. S. 46. 柴田訳 三九頁参照。
- (8) Sämtliche Schriften 4. L'achèvement de la philosophie classique : S. 502. 柴田訳『ヘーゲル・マルクス・キエルケゴール』二五頁参照。
- (9) Sämtliche Schriften 4. S. 66. 柴田訳 『ヘーゲルからニーチェへ』六一頁参照。
- (10) ibid. S. 47. 柴田訳 四十頁参照。
- (11) ibid. S. 63. 柴田訳 五八頁参照。 S. 499. 柴田訳『ヘーゲル・マルクス・キエルケゴール』二十頁参照。
- (12) ibid. S. 44. 柴田訳 三八頁参照。 S. 222. 柴田訳 二三〇頁参照。
- (13) ibid. S. 42. 柴田訳 三六頁参照。
- (14) ibid. S. 69. 柴田訳 六四頁参照。
- (15) ibid. S. 536. 柴田訳『ヘーゲル・マルクス・キエルケゴール』八一頁参照。
- (16) ibid. S. 58. 柴田訳 五二頁参照。
- (17) ibid. S. 67. 柴田訳 六二頁参照。